

大阪大学図書館報

Vol.35 No.1 June, 2001 (平成 13 年) 通巻 139 号

目 次

- わが青春のゴールドスミス・ライブラリー
- 図書館における情報環境整備の現状について
- 最近の附属図書館利用動向
- 教官著作寄贈図書
- お知らせ
 - ・ Web of Science、JSTOR サービス開始
 - ・ いちよう祭展示会を再開
 - ・ 大型コレクション購入
 - ・ 電子ジャーナル最近の動き
- 会議・日誌

わが青春のゴールドスミス・ライブラリー

川 北 稔

1987年夏、ずいぶん久しぶりにロンドン大学付属図書館本館にあるゴールドスミス・ライブラリーに足を踏み入れた私は、一瞬目を疑った。人がいないのだ。ライブラリーのたたずまいは、いまや中年になっていた私が、もっと若いときに知っていたものとはまったく違っていたのだ。少なくとも、私の知っていた1970年代初頭のゴールドスミス・ライブラリーは、意気軒昂としたアフリカ人の若い歴史家であふれていたはずである。ところが、もはやそこはただ、瀟洒で静かな書庫があるだけで人影はほとんどなく、じつに閑散としていたのである。

いまになって、歴史研究者の端くれとして考えれば、それこそ世界の現代史が一こま動いた証拠であったようにも思うのだが、そんなことはよほど後になって、このときの衝撃の意味を反芻してようやく納得したことであるにすぎない。

* * *

私事で失礼ながら、1971年という年は忘れられない年である。この年、東京大学で開かれた学会のシンポジウムが、研究者としての私

の運命を決めたからである。戦後日本のイギリス史研究の決定的な転換点となったこのシンポジウムで、私はイギリス近代史を「帝国とジェントルマン」を軸としてみるという、自分の研究の基本命題を公表した。しかし、このテーマに肉付けをして、成果を刊行するまでには10年以上を要した(このあたりの事情は、『学問は面白い』講談社メチエ選書、2001年、に触れておいた)。この10年間に最もよく利用したのがゴールドスミス・ライブラリーである。私の青春後期は、まさにこのライブラリーとともにあったといえる。

ゴールドスミス・ライブラリーというのは、ロンドン大学の付属図書館本館の大きな一室を占めている。近世イギリスの経済パンフレットの、ほとんど完璧なコレクションである。図書館自体がロンドン大学のメイン・ビルディングのなかにあるので、大英博物館とは文字通り指呼の距離である。ゴールドスミス・ライブラリーの部屋は、荘厳な木製ガラス張りの本箱に周りを取り囲まれているので、そこにいと、巨大な高級家具のなかにいるような気分になる。

このコレクションは、その名のとおり、ゴールドスミスのギルドが徹底して収集したものである。ゴールドスミスというのは、かつてロンドンで繁栄を極めた金細工人たちのことで、もともと上流人士のために金の細工をしていたが、やがて金の細工物を担保として融資を始め、銀行家に転身していった(「金匠銀行家」)人びとである。

近世イギリスの社会経済史研究には、いまでもこのライブラリーを利用することは不可欠である。もっとも、いまでは、このコレクションの主要な部分はマイクロ化されており、阪大の近辺の大学図書館でも、かんたんに見ることができる。しかし、当時は、マイクロフィルムのかたちで取り寄せるにも、現物を確認することができないと、難しいことも多かったし、なかには製本などの具合で複写で

きないものもあったから、なんとしても現場でオリジナルを見るに越したことはなかった。

いうまでもないことながら、ロンドンのブルームズベリー周辺には、大英図書館(周知のとおり、いまは少し移動した)や大英博物館をはじめ、多数の図書館、博物館が集中している。ロンドン大学の付属図書館本館も、そのひとつである。ロンドン大学のこの周辺に位置するカレッジやスクールもそれぞれの図書館を持っているし、少し足をのばせば、LSE(経済・政治学部)の図書館もある。それどころか、ロンドン大学付属図書館本館と同じメイン・ビルディングにある歴史研究所も、実際には歴史学の史料ばかりを集めた大きな図書館のようなものである。

東京大学でのシンポジウムの翌年、1972年に、私ははじめてゴールドスミス・ライブラリーを訪ねた。予想外のことに、そこにはアフリカ人の研究者があふれていた。1960年という年は、歴史上「アフリカの年」といわれるように、この年を中心にアフリカのナショナリズムが高揚し、多くの植民地が独立を達成した。それから10年ほどしか経っていない時代である。アフリカ・ナショナリズムには、なお盛んなものがあつた。ナショナリズムは歴史学を必要とする。国家統一をめざした19世紀ドイツ人たちが、ランケ以下の「ドイツ正統史学」を必要としたのと同じである。部族対立を解消して国民国家としての統合を果たそうとするアフリカ民族主義者たちにとって、「歴史」は国民意識涵養のために不可欠な道具立てであった。

しかし、アフリカ人が自分たちの「歴史」を復元しようとしたとき、その史料というべきものは、ヨーロッパにしかなかった。それも大西洋奴隷貿易の最盛期であった18世紀については、とくにイギリスかフランスにしかなかったといえよう。だから、自分たちの歴史を書こうとしたアフリカ人研究者たちは、ゴー

ルドスミス・ライブラリーを訪ねるしかなかったのである。

カリブ海のトリニダード・トバゴの独立運動を指揮し、独立後、亡くなるまで四半世紀にわたって首相をつとめた歴史家に、エリック・ウィリアムズという人物がいる。イギリスの産業革命を、カリブ海の黒人奴隷の立場から見据えた仕事は、歴史家としての彼の主著である。いまでは、彼の残した関係史料一式が、ユネスコの世界遺産に登録されている——娘さんのエリカに依頼されて、私の翻訳も送ってあるが、そういうものまでまとめて指定されているのかどうかは知らない——ような人物である。このウィリアムズにいささか傾倒していた私自身も、ゴールドスミス・ライブラリーには、これらのアフリカ・ナショナリストたちと同様の期待をもっていたので、まえもって予想はしなかったことであるが、彼らがそこで活動していることの意味は十分に理解できた。

* * *

ところで、1972年から翌年にかけてのロンドンでの生活は、エスニシティの問題についての私の考え方を大きく変えた。いまでこそ常識になったが、当時は、エスニック・モザイクとしてのロンドンの実情をあらかじめ教えてくれる教科書は、日本にはまるでなかった。この目でみるまでは、そのような姿は想像もできなかったのである。戦前からの「あこがれのイギリス」像の上に、マルクスとマクス・ウェーバーの理論を重ねたものが、いわゆる「戦後史学」の実体であったので、そこで描かれていたイギリス像は、現実とは遠くかけ離れた、白人ヨーマンなどの世界でしかなかったのである。それだけ、日常の生活体験での衝撃は大きかったが、ゴールドスミス・ライブラリーやメイン・ライブラリーでの多様なエスニック集団に属する人たちとの交流の経験も強烈であった。

エスニシティや生活文化の問題は、ひ弱い「理論」ではとても解決できない。この当時、北部イングランドの田舎町の公立中学で、白人の親たちが子供を別の学校に転校させたいという運動を始めた。この学校は、アジア系移民の子弟が生徒の95パーセントを占めていたから、このこと自体は、不思議なことでもなかった。

しかし、このとき白人の親たちが訴えた理由には、問題の深刻さを浮き彫りにしたもので、とても考えさせられた。自分たちは決して人種主義者ではないが、給食に毎日チャパティが供され、インド音楽が教えられるのは耐え難い、と彼らはいうのである。人種差別に観念的に反対を表明することは容易だが、チャパティの給食に耐えることは、なかなか大変である。エスニック・モザイクとしてのロンドン社会を描くことは、その後もひとつのプランとして持ち続けているが、最近の忙しさからすれば、もはや定年まで持ち越さざるをえない情勢である。

* * *

1987年にゴールドスミス・ライブラリーを再訪したときの衝撃には、冒頭で触れた。

あの活気に溢れていたアフリカ人たちはどこへ行ってしまったのか。アフリカ諸国の独立はすでに既定の事実となっていた。アフリカの知識人にとっては、もはやナショナルな感情の高揚よりも、その開発の方がより火急の課題となっていた。知識人の関心は、開発理論や技術移転などに移行し、歴史研究はもはや実学としての意味を失いつつあったらしいのである。第三世界の知識人の状況は、この間に様変わりしたらしいのである。

1987年の私は、ゴールドスミス・ライブラリーでは、ひたすらジョナス・ハンウェイの書いたパンフレットを読み漁った。ブルームズベリーの一角にいまも現存する、ハンウェイの親友キャプテン・コーラムの捨て子収容所が創設されたいきさつと、これもランベス近くでいまも活動

中の海洋協会の設立に際しても大量に書かれたパンフレットを分析するためである。

ハンウェイというのは、18世紀にはよく知られていた福祉活動家でもあれば、リスボン駐在の長かった貿易商社マンでもあり、ロンドンにあってロシアとの貿易を行っていたモスクワ(ロシア)会社のために、カスピ海からイラン北部を探検した探検家であり、飲茶の習慣を鋭く批判した反茶派の社会批評家でもあった。同時に、イギリスの男性ではじめて雨傘をさした「変わり者」ともされている人物でもある。「帝国とジェントルマン」をサブタイトルとした『工業化の歴史的前提』(岩波書店、1983年)を書こうとしていて気負いのあった十数年まえとは違い、今回はきわめて楽しい仕事ぶりであった。それだけ、『民衆の大英帝国』(岩波書店、1990年)は肩の力を抜いて書くことができたということである。

第一、この間にも戦後の西洋史学では考えられなかったマニュスクリプトを読むことが、日本人の研究者のあいだでも普通のことになっていたから、私の仕事場もキューガーデンの中央公文書館(PRO)が中心となっていた。そのために、ゴールドスミス・ライブラリーでの印刷史料を読むことは、どちらかというところと気楽な仕事の部類に入っていたのである。

それにしても、この間に私がゴールドスミス・ライブラリーで出会った研究者は、数えるほどしかいなかった。そのうちのひとり、鉄道史をやっているという中国人であった。中国人のイギリス経済史研究者というものに出会ったのは、このときが最初であった。

南京近郊からの初めての留学生が、イギリス経済史の研究をしたいと言って阪大の私の

もとにやってきたのは、それから何年もしてからであった。そういう意味でも、世界の現代史はまた一コマ動いたのであった

* * *

近年の図書館が情報化の波によって、電子図書館の方向をたどっているのは、むしろ不可避免なことである。しかし、デジタル化された資料は、歴史研究者のいう「史料」とは違う。歴史学の世界にも、コンピューター処理ができたおかげで、発展させられた個別テーマはいくつもあるが、他方では、デジタル化はあくまで便宜的な手段であるにすぎない。デジタル化されたデータは、「本物」ではないから、徹底した「本物」志向の歴史学とはどこかかみ合わない部分もある。吉野ヶ里や平城宮跡に「建物」が建てられているのを見て、愕然とする歴史家は多いはずである。いくら史料で可能な限り調べたといわれても、世の中に存在しないものを「復元」するのは、コンピューター・ゲームと学問の区別が付かないような話で、歴史学の本道からすれば一種の「史料のねつ造」である。

資料館をもたない大阪大学では、図書館と新設されるはずの博物館のあいだで、そのどちらにもぴったりとはいえない、歴史家のいう「史料」にあたるもの——「本物」の古文書や古書籍——をどのように扱うのかという問題が、電子図書館化の課題とともに、重要な課題として残されているように思っている。

このことは、大阪大学への留学生が、「わが青春の附属図書館」といつてくれるかどうかの問題でもあるように思う。

(かわきた・みのる 附属図書館長・文学研究科教授)

図書館における情報環境整備の現状について

附属図書館では電子メディアや電子情報機器の利用に対応した館内の情報環境の整備を進めています。特に今年に入って本館、分館での情報環境の整備が進んでいますので、その現状をご紹介します。

○電子図書館システムの導入に伴う整備

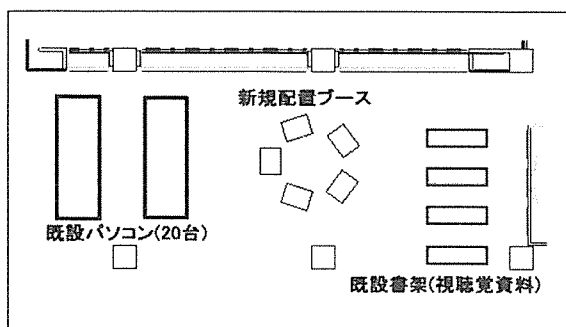
今年9月より、サイバーメディアセンターとの連携により、資料電子化システム、情報基盤システム、電子コンテンツなどから構成される「電子図書館システム」が図書館に導入されることになっています。このシステムの詳細については、次号でご紹介する予定ですが、今回はその一部として、本館・分館の情報機器の整備についてとりあえずお知らせします。

・本館の視聴覚ブースの整備

本館A棟(新館)3階のマルチメディア・ネットワーク・コーナーに、新しく視聴覚ブースが入ります。利用開始は9月からの予定です。

コーナーに配置されている、ビデオ、カセットテープ、CD等の視聴覚資料の他、海外衛星放送の受信も可能です。

なお、機器設置・調整作業のため、マルチメディア・ネットワーク・コーナーは、7月16日から8月末まで利用禁止となります。(視聴覚資料の貸出はできます。)



新しい視聴覚ブースの配置図



整備中のマルチメディア・ネットワーク・コーナー

・情報コンセントの整備

本館、分館内に情報コンセントを整備します。図書館内に持ち込んだノートパソコン等を、学内LANに接続して利用することができるようになります。利用者認証システムが導入されますので、利用にあたっては、所定のID(サイバーメディアセンター情報教育用計算機システムおよびCALL教育システム共通のID等)が必要になります。

・VOD 端末の整備

学内で作成されたビデオコンテンツや海外衛星放送の視聴、Web、メールの利用などに使用できるVOD (Video on Demand) 端末を整備します。

本館3階マルチメディア・ネットワーク・コーナーにはすでに20台配備されていましたが、5台増設、生命科学分館4階のLRCに3台、吹田分館2階に3台配置されます。このVOD端末の利用にも、上記の利用者認証システムが導入されます。

○生命科学分館の情報環境整備

・利用案内端末 (1F 閲覧室 (準備中))

生命科学分館の利用案内情報に自由にアクセスできるよう、ホームページと関係図書館等に

接続する予定です。

・電子ジャーナル端末（1F-3F閲覧室(準備中)）

電子ジャーナルは、研究室等からホームページをゲートウェイとして利用できますが、館内からも利用できるよう4台の専用端末を設置する予定です。

この他、文献検索については、1階の17台の端末を利用することができます。

・CD-ROM用パソコン（4F LRC）

従来のCD-ROM用パソコンを更新し、セキュリティにも配慮することにより、自由に利用できるようになりました。また、これに伴いソフトの新規購入も開始し、現在15タイトルが自由に利用できます。この他、このコーナーでは、約1,500点のビデオソフトを利用することができます。

・プレゼンテーション設備（4F AVホール）

AVホールでの講義やセミナーに利用できるよう、プレゼンテーションやインターネット接続のできるパソコンが1台設置されました。これは、既設のビデオプロジェクタに接続してあります。

また、スライドプロジェクタ、OHP、資料提示装置、ビデオデッキ、LD/CDプレーヤ、カセットデッキも備えています。座席数は80席です。申込は受入掛（4F）で受け付けています。

○吹田分館視聴覚ホールの機器整備

視聴覚ホールは築後30年を経過し、機器が老朽化していたため、その機能を十分果たせませんでしたが、平成12年度工学部重点化経費の申請が認められ、平成13年2月に最新のプレゼンテーション機器が導入されたことにより、利用者サービスの格段の向上が可能となりました。

ホール前部に操作卓を設置し、各種機器を収

納し、ノート・パソコン(Windows/Mac)も接続できます。インターネット、ビデオ、DVD、資料提示装置の立体映像等を、通常照明で視ることのできる高輝度プロジェクターにより投影できます。又、最新ワイヤレス・マイク類も導入し、プレゼンテーション設備の充実を図りました。

学会、研究会、シンポジウム、セミナー、論文発表会、ガイダンス、映画会等多目的に使用されています。

導入機器は、概略以下のとおりです。

- 1) 液晶プロジェクター（2800ANSIルーメン：天吊り）
- 2) DV / VHS ビデオ・ダブルデッキ
- 3) 資料提示装置（立体的資料等、各種資料の投影）
- 4) DVD プレーヤー 他。

なお、吹田分館視聴覚ホールは、ODINS-III整備計画による、学内マルチメディア講義システムの設置部局（附属図書館本館、工学部共同講義棟他）との間で遠隔講義・会議が行えるように機器を選定していますので、今後、学内マルチメディア講義システムに接続が可能です。



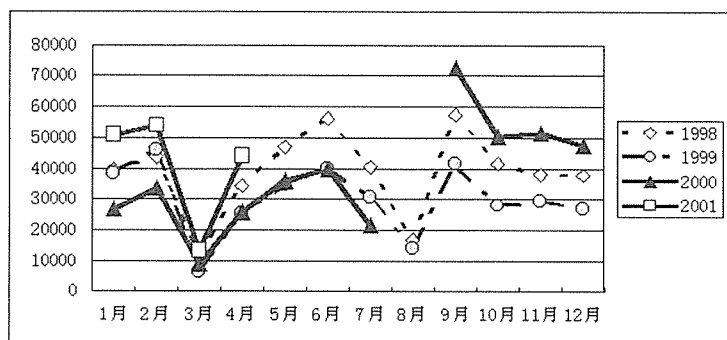
新しい視聴覚ホール設備

最近の附属図書館利用動向

1. 本館新館のオープン後の利用

昨年9月に新館がオープンして以来、入館者数が大幅に増加しています。

下のグラフは、1998年以降の月ごとの入館者数を示したものです。1999年から2000年7月までは、工事の影響で図書館の利用者用スペースが縮小されていたため、前年よりも少なくなっていますが、9月以降は、それ以前のどの年よりも利用が増えていることがわかります。



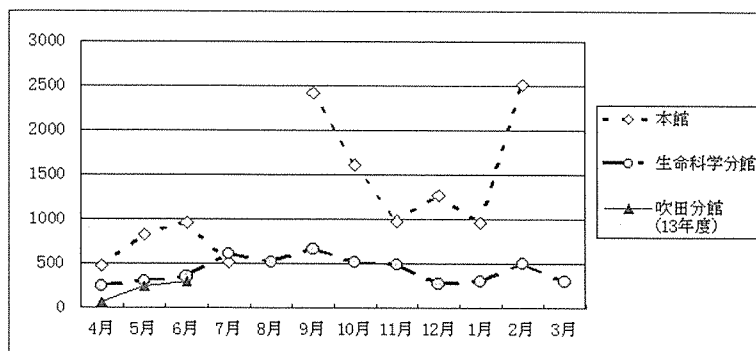
※ 2000年8月は休館

また、本館の貸出冊数も基礎工学部・理学部の学生を中心に増えています。これは、両学部の図書室にあった図書が本館に移転してきた影響が大きいと思われます。

2. 日曜開館の利用

本館では平成12年度から日曜開館を開始しましたが、土曜日とともに利用者は順調に増えています。特に、新館がオープンした9月以降は大幅に人数が伸びています。新館オープン後、B棟4階に約80台の端末を備えたサイバーメディアセンター分散端末室が設置され、土曜・日曜も使えるため、そちらを利用に来ている来館者も多いものと思われます。

生命科学分館でも平成12年度から日曜開館を開始しました。こちらは、土曜・日曜に利用が分散する傾向にあり、利用者にとって都合のいい時に来館利用ができるというメリットが生まれているようです。また、本年4、5月の実績では、2年目に入った日曜開館の利用者数が大幅に伸びています。また、吹田分館では本年度より日曜開館を開始しました。4月はまだあまり開館が知られていなかったためか、利用者は少なかったようですが、5月から急激に利用が伸びています。



日曜開館開始後の入館者数の推移 (本館・生命科学分館は12年度、吹田分館は13年度)

■■■■■ 教官著作寄贈図書 (2001/Mar.-June.) ■■■■■

本 館	
鈴木 毅 (工、助教授)	JKKハウジング大学校講義録 2 東京：小学館スクウェア, 2001 (吹田分館にも寄贈)
山下 仁 (言文、助教授)	「正しさ」への問い：批判的社会言語学の試み / 野呂香代子, 山下仁編著 東京：三元社, 2001
松井 茂記 (法、教授)	情報公開法 / 松井茂記著 東京：有斐閣, 2001
藤原 守 (核物研、助教授)	Giant resonances GR 2000 : proceedings of the Seventh International Topical Conference on Giant Resonances (GR 2000), Osaka, Japan, 12-15 June, 2000 / edited by M. Fujiwara...[et al.]. Amsterdam : Elsevier, 2001 (吹田分館にも寄贈)
生命科学分館	
藤原 英明 (医、教授)	実例を中心とした高分解能核磁気共鳴入門 / 佐々木喜男編著 第2版 東京：廣川書店, 1991 (廣川化学シリーズ ; 1)
吹田分館	
大川 剛直 (工、助教授)	経営情報処理のための知識情報処理技術 / 辻洋, 大川剛直共著 東京：コロナ社, 2000
荒井 栄司 (工、教授)	Human friendly mechatronics : selected papers of the International Conference on Machine Automation ICMA2000, September 27-29, 2000, Osaka, Japan / Co-sponsored by Japan Society for Precision Engineering, International Federation for Theory of Machines and Mechanisms ; edited by Eiji Arai, Tatsuo Arai and Masaharu Takano Amsterdam : Tokyo : Elsevier, 2001
藤田 正憲 (工、教授)	バイオレメディエーション実用化への手引き / 藤田正憲 [ほか] 編 東京：リアライズ社, 2001
薬学部図書室	
米田 該典 (薬、助教授)	洪庵のくすり箱 / 米田該典著 吹田：大阪大学出版会, 2001
蛋白質研究所図書室	
松浦 良樹 (蛋白研、助教授)	Enzyme chemistry and molecular biology of amylases and related enzymes edited by The Amylase Research Society of Japan Boca Raton : CRC Press, c1995

(敬省略、受付順)

■■■■■ お知らせ ■■■■■

● Web of Science、JSTOR サービス開始

世界的によく知られているこれら二つのデータベースが、サイバーメディアセンターとの連携により導入された電子図書館システムの一部として、大阪大学内で利用可能になりました。

Web of Science は、引用文献索引 Science Citation Index を Web 上で検索できるようにし

たデータベースです。JSTORは、学術雑誌のバックナンバーを創刊号から電子化したデータベースで、人文、社会、数学等の分野の主要雑誌を収録しています。両方とも、大阪大学のキャンパス内から利用ができます。URLは以下のとおりです。

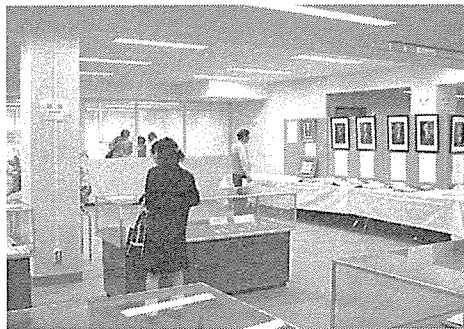
Web of Science: <http://wos.isiglobalnet2.com/>
JSTOR: <http://www.jstor.org/>

8月末まではトライアルですが、9月からは正規のサービスとなります。サービス内容は変わりません。また、来年度以降も継続される予定です。

この二つのデータベースについての利用者説明会を、9月初め頃に開催する予定です。

●いちよう祭展示会再開

本館新館の建設工事のため2年間中断していた「いちよう祭展示会」が、今年度再開されました。



これは毎年5月1日の大阪大学創立記念日前後に「いちよう祭」行事の一環として、文学・法学・経済学3研究科・学部と、附属図書館との共催で開催されていたものです。

今年度の展示会はB棟4階の展示コーナー等を会場に、5月1日に開催されました。入場者は151名で、会場で実施したアンケートによれば、約3分の1以上が学外者でした。

学 内		学 外			
教職員	学 生	社会人	大学生	高校生	その他
27.4%	35.7%	13.1%	3.6%	4.8%	15.5%

●大型コレクション購入

附属図書館では平成12年度大型コレクションとして、「ドイツ公法コレクション」Kollektion von Öffentliches Rechts in Deutschland を購入しました。

このコレクションはドイツの行政法の専門家スクーピン (H.U.Scupin) 教授、シーダーマイアー (R.Schiedermaier) 教授の旧蔵書で構成されており、行政法、国際法、法哲学、憲法、法政史等の古典的文献が含まれています。

●電子ジャーナル最近の動き

Oxford University Press の電子ジャーナル約170タイトルが、非購読誌も含めて利用可能になりました。これは国立情報学研究所の電子図書館サービスで試行的に提供されているもので、期間は来年3月までです。

電子ジャーナルのタイトル数は年々増加し続けており、今年は約1,900タイトルのフルテキストが利用できるようになっています。現在利用可能な電子ジャーナルのタイトルには頻繁に追加等の変動がありますので、最新情報は図書館ホームページでチェックしてください。

■■■■ 会 議 ■■■■

図書館委員会

3. 6 (火) 10:00 ~ 11:45

1. 平成13年度事業費予算要求について、審議した。
2. 平成13年度データベース検索システムの料金について、審議した。
3. 吹田分館における日曜日開館について、平成13年度から実施することとした。
4. (1) 図書館委員会規程
(2) 豊中地区運営委員会規程
(3) 吹田地区運営委員会規程
(4) 附属図書館利用規程
の一部改正を承認した。

5. 平成14年度新規概算要求について、審議した。
6. 平成13年度研究開発室室員の選考について、審議した。

電子図書館システム・デジタルコンテンツ合同委員会

3. 9 (金) 10:00 ~ 11:00

1. データベースアンケート集計結果の説明があった。
2. サイバーメディアセンターで提供予定のデータベースについて、審議した。
3. デジタルコンテンツの増計画の概要について、説明があった。

電子ジャーナル導入検討WG委員会

3. 21 (水) 10:00 ~ 11:40

1. 「電子ジャーナル導入等に関するアンケート案」について、審議した。

分館長会議

4. 9 (月) 13:00 ~ 14:00

1. 附属図書館の運営について、審議した。

電子ジャーナル導入検討WG委員会

4. 25 (水) 10:00 ~ 11:05

1. 「電子ジャーナル導入等に関するアンケート案」を「電子ジャーナル導入検討WG報告」に変更することとした。

■■■■■ 日 誌 ■■■■■

H 13.	3. 6	図書館委員会	(本館)
	3. 9	電子図書館システム・デジタルコンテンツ合同委員会	(本館)
	3. 21	電子ジャーナル導入検討WG委員会	(本館)
H 13.	4. 1	川北稔附属図書館長就任	
		中村仁信生命科学分館長就任	
		北川浩吹田分館長就任	
	4. 9	分館長会議	(本館)
	4. 25	電子ジャーナル導入検討WG委員会	(本館)
	5. 17 ~ 18	第72回日本医学図書館協会総会	(栃木県総合文化センター)
	5. 28	外国雑誌センター館会議	(東京大学)
	5. 29	国立大学附属図書館事務部課長会議	(東京医科歯科大学)
	5. 30	国立大学図書館協議会受賞者選考委員会	(東京大学)
	5. 30	国立大学図書館協議会著作権特別委員会	(東京大学)
	5. 30	国立大学図書館協議会常務理事会	(東京大学)
	5. 31	図書館電子化システム特別委員会	(東京大学)
	5. 31	国立大学図書館協議会理事会	(東京大学)